

仏教伝来による 群馬の変化と それらの新しい見学 方法

群馬県立中央中等教育学校 1年 竹内健真

1. 研究の動機

私は群馬の古墳が好きだ。群馬には古墳が現存するもので約二千基。平成24年から始まった古墳総合調査では13249基の古墳が確認されている。その多さゆえ、都道府県別大型古墳ランキングでは4位を保持している。そのため、群馬では前方後円墳を中心に前方後方墳や円墳、方墳など様々な形がある。

なぜ、ここまで群馬は古墳が多いのか。それは有力豪族が多かったから。ではなぜ「群馬にこれほどの有力豪族がいたか」。これは東国文化副読本によると、「大陸からの先進技術」がキーワードらしい。

「大陸からの先進技術」というわけでもないが、日本は6世紀の初め、百済より仏教が伝えられている。これは古墳が衰退した大きな理由である。このことは群馬も例外ではない。ここで私の頭に一つの疑問が生まれた。「群馬に仏教が伝来した直後、古墳や埴輪はどのような形に変わっていく。仏教伝来後の群馬はどのような風になっていたのか。」

話は変わるが、私は小学生のころ、趣味で古墳めぐりをしており、その一貫で室塔山古墳や蛇穴山古墳を訪れた。この二つの古墳は自由に石室に出入りすることができ、室塔山古墳にいたっては間近で石室の中で家形石棺が見れるのである。私は石室の中に入ったとき違和感を覚えた。今まで入った石室の壁と微妙に違うのだ。きれいに石材加工されて、すき間なく積まれていた。また、室塔山古墳の石棺には下が模様なくくりぬきがあった。興味を持ち近くの博物館で調べると、この二つの古墳は総社古墳群の一部で仏教伝来直後につくられた古墳だった。つまり、この研究にぴったりの古墳である。

2. 研究テーマとリサーチクエスト

研究テーマ

仏教伝来直後の古墳の変化とその後

リサーチクエスト

1. 群馬に仏教が伝来した直後は古墳はどのように変化したか。
2. 仏教伝来からしばらく経った群馬はどのような様子か。

3. 研究方法

今回はリサーチクエスト(以下RQ)が2つある。つまり、それぞれにあった遺跡を2つ選ぶ必要がある。RQ1は研究動機にのせたように総社古墳群に行く。ではRQ2はどの遺跡を選ぶ必要があるか。仏教伝来後となるため、だいたい7世紀~8世紀あたりを調べることとなる。よって7世紀~8世紀にあり、なおかつ仏教に関係しているのは上野三碑、山王廃寺跡、上野国分寺跡となる。

行く遺跡は決定したため、どのように研究するかとなる。

研究手順は下の図の通りである。

研究手順

- ① 総社古墳群を訪れる。→ここでは石室の壁、石棺が他の古墳と比べてどのように違うかを注目。また、当時どのような姿をしていたかについても書いてある。→注目
- ② 前橋市総社歴史民族資料館を訪れる → ①で得た情報を深く理解して、知識を深める。
- ③ 国分寺跡ガイダンス施設上野国分寺館 → 上野国分寺がどのようなものが理解を深める
- ④ 上野国分寺を訪れる → ③で得た情報を基にどのようなものか目で確かめる。
- ⑤ 疑問について図書館で調べる
- ⑥ 現段階の課題点を見つけて改善策を考える。

4. 研究

「4-①総社古墳群を訪れる」および「4-②前橋市総社歴史資料館」

「4-①」および「4-②」-1

蛇穴山古墳

蛇穴山古墳についてのデータ

前橋市総社町にある7世紀末の大型方墳

墳丘は一辺約43m、高さ6.5m、二重の堀があり、全体で一辺82m

総社古墳群で一番最後につくられた古墳。

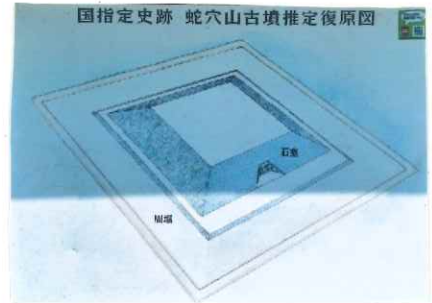


写真 1

実際に訪れた結果

蛇穴山古墳を訪れた結果、気づいた部分か5つある。

1. 埴輪がない！
2. 玄室の壁一枚が一枚の巨石
3. 入り口前に石でつくられたハの字がたの壁
4. 玄室の奥に置かれているなぞの石
5. 入ったらいきなり玄室

この5つについては理解を深めるために博物館や本を用いて調べた。

1. 埴輪がない。
これは蛇穴山古墳の近くにあった推定図(写真1)では埴輪が書かれておらず、HAN1-本で調べたところ、すでに前方後円墳が消滅している7世紀末では埴輪も消滅しているのである。つまり、仏教伝来により、前方後円墳と埴輪は消滅したのである。

2. 玄室の壁一枚が一枚の巨石
玄室に入ったその時、自分はその巨石の壁に圧倒された。写真2は奥の玄室の壁である。となりに私がいるため、私が163cmだから約2mほど。
どうやってつくったかは東国文化副読本によると石の表面をふくらみを持たせて磨き角を削り、組み合わせるといふ当時の最先短技術を用いている。このことから総社あたりには四王寺や山王院寺などもあり、すぐれた石材加工技術が共通しており、仏教と関連した有力豪族がいたと思う。写真2→



写真3

3. 入り口前に石でつくられたハの字に開かれた壁
ハの字に開いた部分も石の積み方はかなりきれいだ。たこれはとくに何も考えずに見逃しそうなところだが、東国文化副読本には「前庭部」とまはれ、お供え物をしてお祈りをさげる場所と考えられているらしい。

4. 玄室の奥に置かれているなぞの石
最初に見たときは石棺かと思ったが、ふたらしきものは見当たらない。また、埋葬者を横にする台と思いきや小さいと思、資料館に行くと、その存在について書かれており、石棺の棺台と見られているらしい。



5. 入ったらいきなり玄室

一般的な古墳は羨道を通して玄室だがこの古墳は石室入口を通り、たら玄室に入るという形である。この理由はいきりとしていないが、もしかしたら前庭部が羨道の役割をしているかもしれない。

<4-①ル4-②>-2

宝塔山古墳

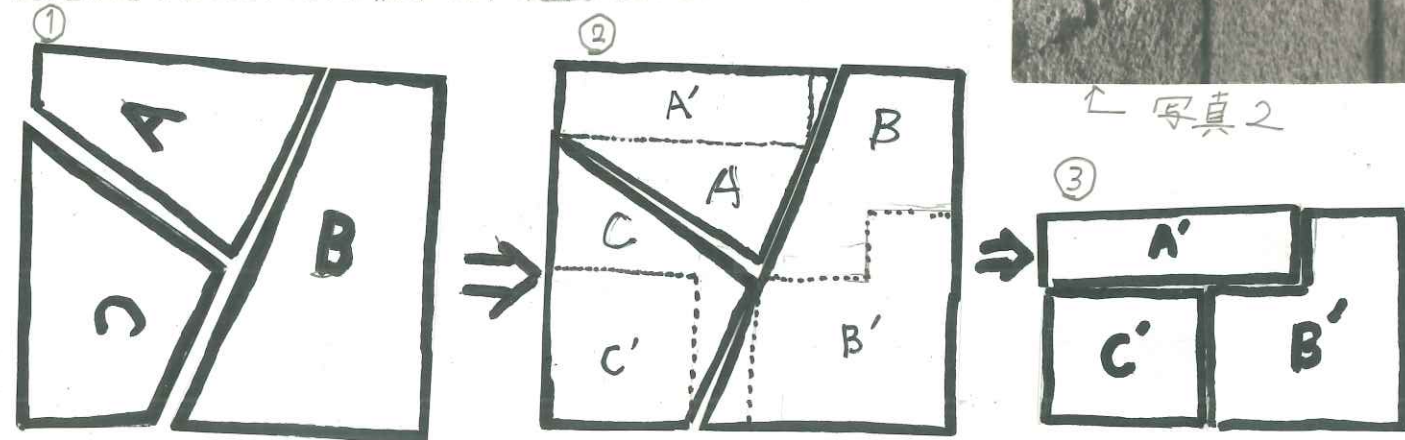
宝塔山古墳のデータ

前橋総社町にある7世紀後半に造られた大型方墳。
墳丘は一辺約60m、高約12m。堀を含めると一辺96m。
総社古墳群の中で最後から二番目につくられた。
三段に築かれたと推定されている。(写真1)

宝塔山古墳で感じた違和感について
宝塔山古墳で感じた違和感は以下の通りである。

1. L字形など様々な形で積まれているが、すき間のない石の積み方
2. 石棺の下部分になぞの模様でくり抜かれている。

1. L字形など様々な形で積まれているが、すき間のない石の積み方
写真2は右側の石室の壁の一部である。
L字形の石などの形があるのに小石をつめて間を埋めるなどせず
すき間をうめている。後ほど言及してみるとこの方法を「截石切組
積」といい、写真2のような石材を四角形やL字形に加工し組み合
わせる高度な技術だと副読本に書かれていた。しかし、高度とい
われてもあまり実感しにくいため、副読本に書かれた方法で「截石切組
積」を体験することにした。結果は下の通りである。



自分の考え方

① 紙を3つに切る

② Aでつくれる最大の面積A'を基準にC'とB'の大きさを決める。

③ ②での下書きを切り、組み合わせる。

2. 石棺の下部分になぞの模様でくり抜かれている
なぞの模様と表記したが、これはまるでよく見る模様だ。その部分は「格狭間」と呼ばれている。
このくり抜きは先ほど述べたようにきでよく見られ、仏具と共通していることから、仏教と関係していた豪族が埋葬者と考えられている。

しかし、「ここまでの石材加工技術を持ち、仏教との関連を持つ、有力そうな豪族が家形石棺なのか」について疑問をもった。

そこで調べたところ船形石棺が長持形石棺はすでに消滅している。さらに世は仏教、石棺の形にはあまり関心をもていなかったと思われる。

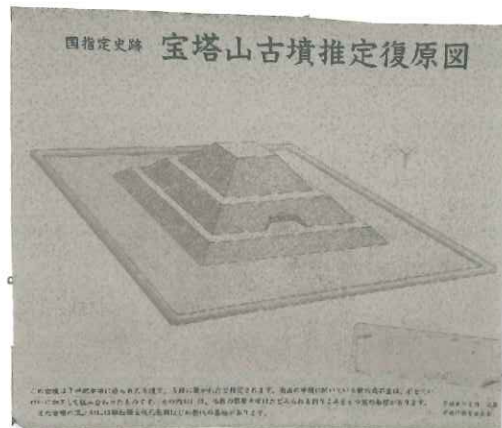


写真1



写真2



<4-③と4-④>

上野国分寺跡

上野国分寺のデータ

741年に創建を命じられ、九年で完成

全国の中では一番早い部類で、さらに東西約219m、南北約231mを築垣で囲むという古代寺院の中では飛び抜けて巨大な規模で「国の華」と称えられる。

上野国分寺跡 QとA

Q1. 国分寺にある七重の塔の高さは何m

A. 60.5m。現在の群馬県庁が約154mのため、群馬県庁の半分より30mほど低い大きさ。この大きさを九年間と短い時間で行ったのはかなりの技術をうかがうことができる。しかし、60.5mもの建物をたてるために柱は不規則である。その柱の太さはかなり実感しにくい。写真1は柱の礎石である。近くにいる人が自分である。つまり、この太さの柱が立っていたのである。

Q2. 国分寺は誰が協力して、誰が管理していたのか。

A. 国分寺はつくるのに当たり、群馬県内の郡が協力してつくったもの。そのため、それぞれの郡の結束力のすばらしさとうかがうことができる。また、国分寺の管理はもろ人僧が行っていましたが、郡も関心を持っていたことも資料から読みとれている。

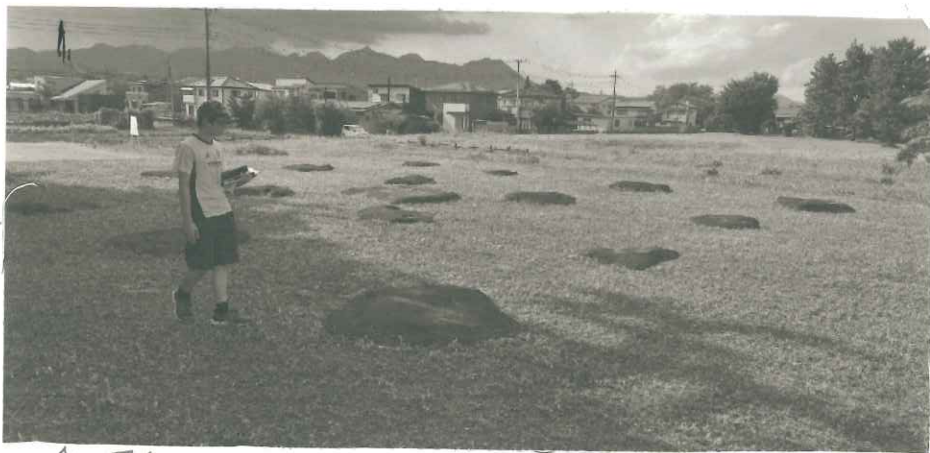
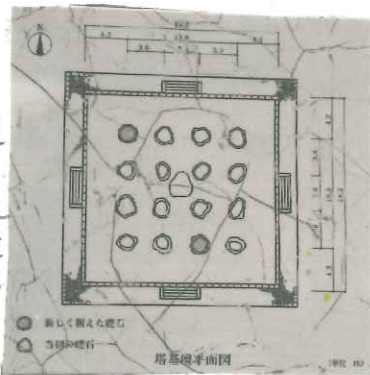


写真1

Q3. 国分寺はどのような役割をしていたのか。

A. 「国分寺」とついているため、もろ人のかつての寺の役割もしているが、経典もかなりの量があったと見られているため、今でいう図書館。他にも位の高い僧は教える例のため、大学、病院としても機能していた。つまり、「国立大学+県立図書館+総合病院」的な施設と副読本に書かれている。



七重の塔の模型

Q4. 国分寺はなぜここに建てられたか

A. 主に3つの理由がある。

1. 北が少し高いから。→これは南が高いと仏様を見下ろす形になるから。

2. 国府や道が近くにあったため

3. 群馬県のほぼ中央にあり、群馬の山々を見渡せるから
聖武天皇は「良い場所に国分寺を建てろ」という詔を出しているため、まさにここはぴったりの場所。

Q5. 最も大事にする必要の南門がなぜ参道がないか

A. 写真1は上野国分寺の復元図である。
 七番手前が南門だが、南門は一番大ににすべき場所だが参道が描かれていない。
 実際の発掘調査でも参道の後は発掘されなかったらしい。
 解説員さんいわく地図を見ると分かるらしい
 国府から国分寺、国分寺から国府へ南門
 を使っていく場合、川を二度渡る必要がある。
 たたこれはとても不便だが、国府から北に
 に進み、尼寺を左に進めば川を一回も渡らず
 に行くことができる。このとき使うのは東門。
 よって南門は不便のため、参道はつくられず
 東門がよく使われていたらしい。

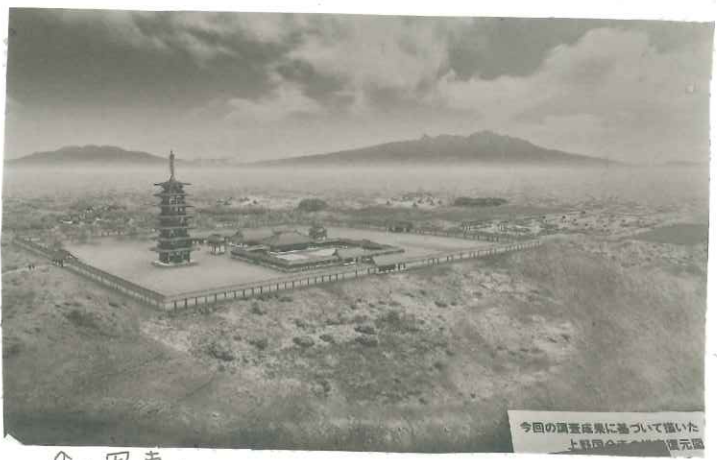


写真1

補足

国分寺の情報だけではRQ2の答えが出せないため、研究動機にも書いてある通りに山王麁寺・上野三碑についても言及することにした。

山王麁寺

塔の基礎や根巻石、金堂の石製の鰐尾などの石材加工技術が高く、これは宝塔山古墳、蛇ヶ山古墳に共通する。
 ↳ 高度な石材加工技術を古墳から寺に集中させたことから、寺の規模や造るのに使われた技術で権力を示すほどまで仏教が豪族間に浸透していたことが分かる。

上野三碑(山王三碑)

長利という僧が母親の供養のために書いた石碑。完全な形で残る日本最古の石碑
 ↳ 古墳でとむらうのではなく、仏教でとむらうということが分かる。7世紀後半にはすでに仏教での供養を行っていた。

上野三碑(金井沢碑)

仏の教えで結ばれた一族が一族の繁栄を願って建てた碑。
 ↳ 仏の教えを大ににして、それにより一族の繁栄を願うということが分かる。
 仏教がかなりの影響を与えていることが分かる。

山上多重塔

9世紀に建てられて、当時の仏教文化を知ることができる石塔。
 ↳ 8世紀〜9世紀にかけては蝦夷との激戦が続き、君民の人は大きな負担を負った。
 山上多重塔には「願うところは、絶え間もなく、地獄火のような苦しみを受けている衆生を救い、永く安らぎを得て悟りの世界へ到達されることである」という文面から仏教が民衆の間にも浸透していることが分かる。

補足2

RQ1でつけ足す情報が1つある。
 右の表は古墳の形の変化と歴史上の出来事である。
 7世紀になると前方後円墳から方墳に変わっていることが分かる。
 それとともに埴輪も消滅。より仏教文化が進み、前方後円墳をなくしていき、寺で権力を示す時代へと変わっていた。
 そして、それが上野国分寺や上野三碑へとつながっていく。

478	倭王武が南朝の宋に使いを送る	遠見山古墳
500年		
	榛名山が墳火 (6世紀前半・6世紀中華)	王山古墳
550年	百濟より仏教が伝わる	
593	聖徳太子が推古天皇の摂政となる	紙柱二山古墳
600年		
603	冠位十二階制定	
604	十七条の憲法の制定	
607	前方後円墳・埴輪の消滅	金宝山古墳
645	法隆寺建立・造像供として小野妹子を派遣	
650年	大化の改新	
663	白村江の戦い	宝塔山古墳
672	山王麁寺の造営	
672	壬申の乱	
681	山上碑が建立	蛇ヶ山古墳
700年		

5. RQに対する問い

RQ1

変化としては以下の通りである

- ① 前方後円墳が消滅して、埴輪もなくなり、方墳がつくられるようになった。
- ② 石棺の下に「格狭間」の形をくりぬくなど仏教と融合した古墳もつくられた。
- ③ 石室の石材加工技術がかなり高度で最先端である。

RQ2

様子としては以下の通りである。

- ① 各郡の豪族が団結して、国分寺を建設した。
- ② 古墳から仏教の寺などとして権力を表していくようになった。
- ③ 豪族間で仏教が浸透していき、仏教を大切にしていこうようになった。
- ④ ③からしばらく経つと民衆の間でも仏教が受け入れられていく。

6. すばらしさと改善点

仏教伝来直後から仏教が伝来してからしばらく経つてからはかなり優れた技術と文化を保持しているが、残念ながらこのような存在は4世紀から5世紀の古墳の存在からはかすんで見えてしまう。

これはPR不足でもあるが、多くの人がこの重要な時代を見逃してしまうのである。

これはあくまでも私の感想だが、この重要な時代について興味関心を持って、知ってほしいと思う。

今回この時期について知ってもらい、興味を持ってもらうことをゴールとして、最新技術などを使った新しい見学方法を知ってもらおう方法を考えている。

7. 新しい見学方法について

新しい見学方法について考えてきた方法は以下の通りである。

1. VRによる復元した姿を歩く

これはかなりの技術が必要だが、現段階、それに近いことは行われている。

横須賀の三笠公園や群馬県の遺跡を家でもスマホで360°見れるものなのがこの例だ。やはり、見学者が少いのは復元されていないがためにインパクトが少いこともある。

保田古墳群の見学者が多いのはこのためだ。だからといって莫大な予算をかけて復元してしまうとは難しいことである。

そこで私が考えたのがVRによる復元と現在の場所を運動させて見学するという方法である。しかし、これはかなりの技術が必要で他、「すべて復元する」という方法より予算がかからないとしても「VR機器」の数をそろえるのにもかなりの予算がかかる。

しかし、完成すればそれを売りに見学者を呼べば、見学者は増えていくのではないかなと思う。

2. ゲーム形式見学

比較的、こちらの方法が行いやすいと思う。これは見学してもしどこの重要な部分が分からないと意味がないため、それを補う方法である。

ゲーム形式見学の構想としては「VS」のマリオパークのところのパワーアップハンドのような方法である。

まず、パワーアップハンドのようなものを見学者にわたす。そのパワーアップハンドのようなものに地図とチェックポイントが表示されており、見学者はそこをめぐる。

チェックポイントについてチェックポイントにあらわしめマークを設置しておき、そのマークにパワーアップハンドで触れる。そうするとクイズが表示され、正解すると10Pもらえる。その後パワーアップハンドに解説が流れ、次のチェックポイントが表示される。そして次のチェックポイントに向かいクイズに答えるのくり返しを行い、最後、ポイント数を確認するという方法。これは別に紙でもウォークラリーとしてできるが、わざわざパワーアップハンドを使えば、子供連れの親に来てもらえる可能性が上がると思われる。そうすれば、親と子両方に知ってもらえ、また、「興味はないけど楽しそうだから来た」という見学者もくるかもしれない。

また、以上の二つの方法が融合したらさらにおもしろいかもしれない。

7. 新しい情報発信

いくら見学方法にこだわっても遺跡に訪れるきっかけをつくらなければ意味がない。
そこで楽しみながら知ってもらい興味を持ってもらうゲームをつくらばいいのではないかと考えた。
その内容は古墳から仏教をテーマにしたゲームで高度な石材加工技術をゲーム上で実感したり、持っているお金で古墳や寺をつくるためにやりくりをするなどRPG的要素を入れながら行うと良いと思う。

完成したとして有料で行っては効果がのぞめないと思う。なぜならお金をはらってまで興味の無いゲームをするはずがないからだ。

あくまで一例だが群馬県のホームページにのせるなどすると効果が期待できると思う。

8. 最後に

今回は古墳から仏教をテーマに研究を行った。その課程で今まで「古墳なんて地味な国分寺はあまり興味ない」と思っていたのがすばらしい技術と文化を目で見て、体感することができる。興味を持てた。

このすばらしい時代について知ってもらうために3つの方法を考えたが、どれもかなりの技術が必要で今は不可能と思っている。しかし、不可能を可能にかえてきた人類なら、とこのことも可能に変え、歴史と最新技術を融合させた新しい見学方法を確立させる日がくると思う。この新しい見学方法で興味のある人もない人も少しだけでもいいから関心を持ってくれるという日が来てくれることを心の底から願っている。

10. 参考資料引用

・群馬県群馬県歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会 発行
東国文化副読本

「史跡上野国分寺跡」のパンフレット
群馬県立歴史博物館発行
群馬県立歴史博物館 常設展示図鑑

桐生市ホームページ
<https://www.city.kiryu.lg.jp>
山手の多量の塔(国指定文化財)ー桐生市